

# 五行の拳

社会人編 第一部

東武瑛



# 五行の拳

社会人編 第一部

東武瑛

大学を卒業した平野は仕事に励みながら、様々な戦いを経験し、少林寺流の支部を赴任地で開設していく。

やがて、地区本部長になり、稽古生を指導し、実力者を大会に送り出す。

宗家の息子が二代目宗家になってからも、少林寺流の師範として組織に貢献する。

そして、直接師事した二代目宗家の逝去を機に独立。

五行館を立ち上げる。

## 目次

- 社会人としてのスタート  
先輩と仲直り  
差し押さえ  
債権回収  
経験者  
一級の小池  
小池に指導  
焼肉屋で  
初めての債権回収  
同好会スタート  
順風満帆な日々続くが  
初めての試練  
体育館の宣伝  
小学生の弟子  
中学生の女子  
平野の痛感  
高知行き  
送別会
- 高知の生活  
道場破り  
勝負  
副所長から所長に  
仙台への異動  
苦難の場所探し  
神社で稽古  
稽古生300人に増え  
型中心  
クーシャンクー  
東北地区本部副本部長として  
本部長に



## 社会人としてのスタート

大学を卒業した平野は希望の会社に就職し社会生活をスタートした。

配属されたのは管理課。

課の新人社員歓迎会で平野は課長に「キミは大学の拳法部の主将だったそうだが正当防衛を除き絶対、ケンカしちやいかんよ」と言われた。

「はい、わかりました」と平野は答えたが、内心、（そんな事、当然だ）と思った。

ところが、課には平野より年下の先輩がいて、「おい、平野。酒つげや」と言ってきた。

ムカツとした思いが込み上げたが「はい、わかりました」と言って平野は年下の先輩のグラスにビールを注いだ。

しかし、それで終わりでは無かった。

年下の先輩は平野に「お前、大学の空手部キャプテンだったらしいが、俺は小学生の頃から、ずっと番長だったぜ。よく隣の学校を潰していったぜ。ケンカにルールは無い。空手なんかケンカ強

い奴には通用しないぜ」と言った。

ムカツとした思いが平野の表情に浮かんできた。

課長は察し、「酒の席だ。我慢しろ」と平野に小声で言った。

歓迎会がお開きになり、課長は「みんな明日はちゃんと出勤しろよ。じゃ俺は帰る」と言い、一人、駅に向かった。

平野も帰ろうとすると、「おい、新人、平野。二次会に行くから付き合え」と年下の先輩が言ってきた。

平野は「先輩。両親が待ってますので今日は失礼します」と言った。

「両親？そんなのどうでも良いから付き合え」と年下の先輩は言い、平野の胸ぐらを掴んだ。

（こうなったら仕方ないな）と平野は決断した。

## 先輩と仲直り

平野は「失礼します」と言い、捕まれた手に逆

手をかけ捻った。小手返しである。

「イテ」と年下の先輩は言い、掴んだ手を放した。

そして「この野郎」と言い、蹴っ飛ばして来た。蹴りと言うには、お粗末な代物で平野は前足を上げブロックした。

「イテ」と言い、先輩は転がり、立ち上がって、右拳で顔面パンチを出して来た。

余りにお粗末なパンチで平野は先輩の顔面を手のひらで押した。

すると先輩はバランスを失い、よろけた。

平野が軽く先輩に金的蹴りを出すと先輩はダウンして踞った。

(やり過ぎかな)と平野は思ったが「失礼します」と言つて駅に向かった。

翌日。

出勤すると課長が「平野。ちよつと来い」と言った。

応接室に入ると先輩がいた。

課長は「お前たち、昨日、ケンカしたそうだな」と言つた。

平野は「はい。しかし正当防衛です」と答えた。

課長は「そうらしいな。溝口から聞いた。溝口は反省しておる。ここで仲直りしろ。このままじゃ、お互い仕事やりにくいだろ」と言った。

すると溝口は「平野さん。俺が悪かったよ。許してくれ。あんたに失礼したよ」と言った。

平野は「先輩。解つて頂ければ良いんですよ。これからも、よろしくお願いします」と言った。

溝口は「これからもよろしく。あんたみたいにケンカ強い人、初めてだよ」と言った。

課長は「じゃあ、仲直りして二人とも仕事に戻れ」と言った。

## 差し押さえ

社会人生活にも慣れたある日。

平野は課長に呼び出された。

応接室で課長は「平野君。そろそろ私と表に行こう」と言つてきた。

## 五行の拳

「わかりました。お伴しますが何処に行くのですか？」と平野が聞くと、課長は「午後から現場に行ってみよう」と答えた。

昼飯を食べ終わると平野は課長と外出した。

「キミは見とるだけで良いからな」と課長は言い、二人は電車に乗り、駅に降りた。

課長は無言で歩いて行く。

平野は課長のカバンを持ちながら、後に着いて歩いて行った。

やがて、課長は雑居ビルの前で立ち止まった。

課長は「行くぞ」と平野に言い、二人は汚いエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターを降りると課長はドアに貼り紙をしてある一室の前に立った。

「見る。これが差し押さえだ」と課長は言った。

「債務者の行方は簡単には解らない。雲隠れしているだろう。債権者もここには、もう来ないだろう」と課長は言う。

その時、エレベーターが止まった。

## 債権回収

エレベーターから降りて来た男は非常に人相が悪かった。

男はドアの貼り紙を見て「チエツ」と言い、平野と課長に「アンタラも遅かったんか」と言って来た。

課長は「私達は様子を見に来ただけです」と答えた。

男は「一足遅かったようだが、ま、何処に行つたか大体察しはつく」と言い、エレベーターに乗り込み、去って行った。

二人もビルを出て喫茶店に入った。

課長はタバコに火を着け、一服した後、「どうだ、現場に行った感想は？」と平野に聞いた。

「そうですね。あれは債務者の家ですか？」

課長は「まあ、そうだ。だが、家はあそこだけじゃ無いだろう」と言った。

「後から来た男が何処に行つたか察しはつくと言っていました」と平野が聞くと課長は「俺達も



解っているさ、だが、張り込みが必要だ」と答えた。  
「債権回収ですか？是非やらせて下さい」と平野が言うと課長は「分かった、君に任せよう。但し、債権者が多いから気をつけてたまえ。社に戻って資料を渡そう」と言った。  
「わかりました」と平野が言い、二人は喫茶店を出た。

## 経験者

翌日の土曜日。

午前の勤務を終えた平野は母校の拳法部に顔を出した。

土曜日の稽古は一時からで道場にいた部員は準備体操をしていた。

主将の新垣は平野の姿を見つけると「先輩、お元氣そうで」と言い近寄って来た。

「どうだい、今年の新入部員は？」と平野が聞くと「結構、才能ある奴が入りました」と新垣は

答えた。  
「小学生の頃から少林寺流の道場に通っていた奴もいます」  
平野は「それは楽しみな奴だな。だが、怪我はさせるなよ」と平野が言った。  
その時「こんにちは」と言っ角刈りの男が道に入ってきた。  
「先輩、奴ですよ」と新垣は言った。

## 一級の小池

その若者は静かに一礼して道場に入ってきた。

「小池。この方が前主将の平野先輩だ」新垣が言うと「初めまして。今年入部した小池と言います」と小池は平野に挨拶した。

「小池君。君は少林寺流空手を習っていたそうだね」と平野が聞くと小池は「はい。中学の年まで鹿児島で習ってました」と答えた。

平野は「ほう。段や級は？」と聞いた。

小池は「一級です」と答えた。

「それは素晴らしいな。在学中に黒帯になれるぞ」と平野が言うと「はい。頑張ります」と小池は答えた。

新垣が「小池。着替えて来い」と言うと「わかりました。失礼します」と一礼して、小池は着替え室に向かって行った。

「ふうむ。中々の逸材だな」と平野が言うと新垣は「まあ、一からやり直す覚悟の様ですからミツチリ鍛えてやりますよ」と言った。

## 小池に指導

日曜日。

平野は再び修道大道場に行き、小池の動きを見た。

小池は基本をマスターしていた。

平野は小池に型の指導をし、休憩の後、防具を付け組手で胸を貸す事にした。

「攻撃して来い」と平野が言うと小池は前手の面突きから前足で廻し蹴りを中段に出した。

平野は前足を引き、後退してさばいた。

小池は更に右廻しを上段に出す。

平野はブロックし螺旋手刀を小池の顔面に出した。

手刀は綺麗に小池の顔面を叩いた。

「参りました」と小池が言うと平野は面を外し「組手慣れはしてないな」と言った。

「組手をした事は無いです」と小池は言った。

「ウム。基本と型は出来てる様だ。ここでは組手中心の稽古をすると良い」と平野は言った。

「はい」と小池は答え、サンドバッグ相手に組手稽古を始めた。

平野は「まず、半跳び足刀をマスターしなさい」と言い、サンドバッグに半跳び足刀を出した。

続いて、後ろ廻し蹴りの模範を示した。

「半跳び足刀と後ろ廻し蹴り。まず、これをマスターしなさい」と平野は言った。

小池は「はい」と言い、サンドバッグ相手に半跳び足刀と後ろ廻し蹴りの練習を始めた。

## 焼肉屋で

思った。

夕方。

平野は新垣と小池を誘い、焼肉屋に行った。

平野は小池に「今年にでも黒帯になって来年の全国大会に出ろよ」と言った。

「はい。大会で優勝を目指して頑張ります」と答えた。

新垣は「自分も優勝目指しています」と言った。

平野は「新垣は突きが得意だからな。小池は蹴りを磨け」と言った。

二人とも「はい」と答え、小池は平野と新垣のグラスにビールを注いだ。

「今年の全国大会は広島で開催される。俺も応援に行くよ」と平野は言った。

焼肉屋を出ると平野は「じゃ、また様子を見に来るよ」と言い、「ありがとうございます。よろしくお願い申し上げます」と新垣と小池は言い、駅まで平野を見送った。

電車の中で平野は（全国大会は楽しみだな）と

## 初めての債権回収

月曜日。

出社すると課長が「平野君、資料を読んでくれたか？当初、君一人で行ってもらおう予定だったが、やはり俺も行く。早速出かける準備してくれ」と言った。

平野は仕度し課長と社を出た。

電車に乗り、殺風景な駅で二人は降りた。

課長は無言で歩いて行き、平野も続いた。

やがて課長は廃屋の様な一軒家の前で足を止めた。

すると、家の中から人相が悪い角刈り男が現れた。

男は「何しに来たんじゃい？」と大声で叫んだ。課長は腰を抜かし、「債権の回収に来ました」と言った。

## 五行の拳

「知らんよ、そんな事」と男が言う。「田中さんを訪ねて来ました」と平野は言った。

「田中？ いねえよ、そんな奴」と男は言う。しかし、平野は引かなかつた。

「居ないはず無いですよ。我々の調査でいるはずです。さあ、出して貰いましょうか」と平野は言った。

「シツコイ、小僧だな」と男は言い、平野に殴りかかつて来た。

（これ幸い。向こうから先に手を出して来た）と平野は思い、男のどてっ腹に三か月蹴りを出した。

「うっ」と言い、男は倒れ込んだ。

平野が家の中に入ると瘦せぎすの男がいた。

「カネは払うから勘弁してくれ」と男は言い、アタツシユケースを開けた。

中には札束が詰まっていた。

「課長、後はお願ひしますよ」と平野は言った。

「平野君、キミやはり強いね。」課長が言う。平野は鞆を開けた。

中にはヌンチャクが入っていた。

## 同好会スタート

初めて債権回収してから平野の武勇伝は社に広まった。

ある日、先輩の一人が「平野君。俺に空手、教えて下さいよ」と言つて来た。

平野は「良いですよ。但し、練習場所は何処にしましょうかね」と聞いた。

「それなら屋上が良いだろう」と先輩は言った。

平野は屋上を見に行き、（まあ、ここで稽古出来るだろう）と思い、課長の許可を得て、社に「空手同好会、会員募集」のポスターを貼り出した。

早速、 $\infty$ 人が入会を申込んで来た。

夜は暗いので稽古日は土曜日の午後と日曜日の午前に決めた。

稽古内容は準備体操、ストレッチ、基本、移動、型。

運動不足の会員は基本で「ちよつと休ませてくれ」と言つて来た。

また、休憩時間、タバコを吸う会員がいたので平野はたしなめた。

そんな感じで同好会はスタートした。

## 順風満帆な日々が続くが

平野の仕事ぶりも社で評判になつてきた。

普段の仕事内容は電話、文書督促が中心のデスクワーク。

と言つても、膨大な量の仕事をこなす毎日だった。

債務者に対して、夜討ち朝駆けする事もある。

債務者が不在の折は居所を探す。

回収率は60パーセントで表彰された。

空手同好会も着実に会員が増え順調。

修道大拳法部から借り、防具を付けての組手稽

古も始めた。

女子社員の入会者もいた。

順風満帆な日々が続いた。

しかし、試練が平野に訪れた。

## 初めての試練

平野が入社して三か月経つ頃のある日。

課長から簡易裁判所の原告に立つ様、言われた。

それは、入社して初めての試練だった。

民事訴訟法に基づき回収する方法だ。

それまで、平野は主に電話、内容証明（文書での督促）、夜討ち朝駆けで回収率100パーセント近い実績を上げていた。

それが認められた結果の抜擢だった。

「平野君。会社は君に期待している。頑張りたまえ」と課長は檄を飛ばした。

その夜、課長に誘われ、平野は焼き鳥屋に連れられた。

課長は「今までの回収よりも責任は重いぞ。民

事訴訟の勉強も必要だ。君にとって試練になるだろう。やれるか？」と言った。

平野は「はい。頑張ります」と答えた。

「よし」と課長は言い、民事訴訟に付いて、自らの体験を踏まえ、平野にレクチャーした。

平野は課長の話を熱心にメモ書きし、家に帰るとメモを読み民事訴訟の本を開き、徹夜で勉強した。

**五行の拳**  
訴訟は民事訴訟（判決、不在判決、和解）、債務名義（判決、仮執行宣言付支払命令）、公正証書、和解調書、強制執行（有体動産差し押さえ）、給与差し押さえ、取り立て命令、代物弁済、商品引き上げ、再分割、転売。

平野は頭が痛くなってきた。

（これは大変な仕事だ。果たして自分に出来るか）平野は不安になってきた。

## 体育館の宣伝

大変困難な仕事を何とかこなす日々が続いたある日。

同好会会員の丸岡が「平野さん。側の小学校の体育館が借りれますので、そこで稽古しましょう」と言ってきた。

平野は（これはチャンスかな）と思い、丸岡に「解りました。小中、高校生も対象としたチラシ、ポスターを作りましょう」と言った。

その日の仕事を終わると平野は早速、ポスターとチラシ作りに取り組んだ。

ポスターは、ともかく、まだコピー代が高額の時代、コピーの枚数も限られていたが、給料から捻出した予算でコピーのチラシも作成した。

それを自分、同好会メンバー、大学の後輩で団地の郵便受け等にポステイングして回った。

これが功を奏し、小中、高校生が体育館に見学に来た。

## 小学生の弟子

## 五行の拳

小中、高校生には色んなタイプの子供がいた。一番、手を焼いたのは小学生の男の子だった。とにかく言う事を聞かない。

口で注意してもダメ。

思わず、（叩いたやろう）と思ったが、父兄からの苦情が来ると面倒だから、それも出来ない。

子供の父兄に「ちよっと、お子さん。言う事、聞かないんで困るんですよね」と話した。

すると「それを何とか指導するのが先生の役目じゃありませんか」と母親に言い返された。

内心（辞めてくれないかな）と思ったが、（ま、これも試練だろう）と考えて、根気よく指導した。何とか言う事を聞くようになったが今度はケガをした。

父兄が来て「ウチの子にケガさせて、どうしてくれませんか？」と言われた。

「すいません。以後、気を付けます」と謝り、（これは仕事よりキツイわ）と思った。

この子は身体が柔軟で稽古内容の飲み込みも早く空手の才能はあった。

（まあ、仕方がない。良い所を伸ばしてやろう）

と平野は思い、根気よく指導する事にした。

## 中学生の女子

中学生の稽古生にも手を焼いた。

女子中学生で素直だが不器用で手取り足取り、指導する必要があったが女子だから触れない。

会には成人の女子もいたが、指導を任せる程の能力は、まだ無かった。

（やりにくいな）と平野は思ったが、教える立场上、ほっておく訳には、いかなかった。

「見て真似をしなさい」と言ったが、真似が出来ない。

（まあ、しょうがないか）と思い、平野は諦めたが「先生。ちゃんと教えて下さい」と言つて来る。仕方なく、平野は手取り足取り、指導した。

次ぎの週、平野が会社に行くとき女子社員が「平野さん。中学生の女の子に触っていた」と噂話をしていた。

(弁解しても、しょうがない)と平野は思い仕事を始めた。

それにしても嫌な気分だった。

## 平野の痛感

高校生の稽古生は男子だった。

が黒ぶちメガネをかけた運動能力ゼロのタイプだった。

根性はあったが拳立伏せ一〇回も出来ない。

基本の四股立ちを教えても、すぐへばる。

正拳突きもへタ、前蹴りもへタ、全てへたくそだった。

何度教えても出来ない。救い様が無いへたくそだった。

だが熱意は、あったので平野は根気よく教えた。

少しずつだが上達してきたので、平野は教える自信を取り戻した。

それにしても、大学生や大人と違って子供に教

える難しさを平野は痛感した。

## 高知行き

平野が出社すると「平野。応接間に来なさい」と課長が言った。

トントんと平野が応接間のドアを叩くと課長がドアを開けた。

奥にはソファアに所長が座っていた。

所長は「平野君。君に御願いたいたい事があつて呼んだ。まあ、座りなさい」と言った。

平野がソファアに座ると「実はな。高知の営業所に副所長として行って貰いたい」と課長が言った。

所長は「君は実績もあり人望もある。是非頼む」と言った。

平野は「はい。でも私に副所長が務まるでしょうか」と言った。

「それは私と課長で相談して決めた。大丈夫だ。



君には出来る」と所長は言った。

降って湧いた話に平野は戸惑ったが「解りました。必ず素晴らしい営業所にします」と答えた。

所長と課長は頷き、「頼むぞ」と言った。

## 送別会

稽古の最後、皆が正座する中、平野は「皆さん。

私は会社の異動で高知に行く事になりました。それで、この会のリーダーは丸岡さんにお願いする事にしました。広島に帰って来た時はここにも寄る様にしますが、丸岡さんの言う事を聞いて修行に励んで下さい」と言った。

稽古の後、大人達で居酒屋に行った。

「平野さん。私にリーダーが務まるでしょうか？」と丸岡が言う。「大丈夫ですよ。自信を持って下さい。皆さんも協力してくれますよ」と平野は言った。

居酒屋を出て皆と別れた後、平野は「高知か。

高知でも空手同好会を作るぞ」と思った。

高知行きを前にした数日後、平野は久しぶりに母校の稽古に参加した。

大学生は、流石に若いだけあり、上達が早い。

稽古の後、平野は「広島に帰った時は寄る様にするからな」と主将に言った。

その後、部員達で送別会をし、平野の門出を祝った。

## 高知の生活

高知の営業所で副所長になった平野は早速、困難に直面した。

まず社員教育。

今まで仕事は教わる立場だったので採用した社員をどう教育すれば良いのか悩んだ。

社員に一通り、仕事の内容と役割を教えたが、平野自身、仕事で解ってない事もある。

社員に質問されて答えられない事もあった。

また、営業所の管理、会計、庶務など初めて取り組む仕事もあった。

一人暮らしに慣れるのも大変だった。

(今は空手どころじゃないわ)と思わずには、いられなかった。

## 道場破り

多忙な日々を送っていた平野に丸岡から電話があった。

「先生。いかがお過ごしですか？同好会は新入者も増え、運営は順調です」と言った内容だった。

平野は仕事に忙殺していたが気分転換を兼ね、ここ高知でも空手同好会を発足する事にした。

ポスターを作り貼ると早速「入会したい」と言う者が現れた。

入会の動機を聞くと少林寺拳法を習っていたが何か物足りなく空手をやってみたい、と言う。

「ウーン。少林寺拳法を習っていたのか」と平

野は思い、(何か面倒な予感がするな)と感じた。が、取り敢えず、この一人の弟子に空手の指導を始めた。

数日後、スキンヘッドの男が稽古場に来た。

平野は「入会希望者ですか？」と聞くと男は「勝負をしたい」と言った。

「解りましたが、まず入会して下さい」と平野は言った。

すると男は「勝負だと言ってるじゃけん。逃げなのか？」と言った。

平野は「これは道場破りだな」と確信し「解りました。では、お相手しましょう」と言い、男を稽古場に入れた。

## 勝負

二人が対峙する。

少林寺拳法の男は前手を下げ、構えた。

平野はノーガードで様子を見る。

「キエイツ」と言いながら男は右廻し蹴りを出して来た。

平野は前進し男の顔面を左手掌底で押さえた。

男は尻もちを付き倒れた。

「大丈夫ですか」と平野が言うと男は「参った」と言った。

男は立ちあがり上がりながら「あんた、強いね」と言った。

「入門させて頂けませんかね」と男が言うと「良いですよ。但し、道場破りは止めて下さいね」と言った。

「解りました」と男は言い、入門した。

## 五行の拳

### 副所長から所長に

高知での仕事を慣れた日、所長が「平野君。応接室に来たまえ」と言った。

平野が応接室に行くと「実はな。私は異動になって転勤が決まった。そこで副所長の君に所長に

なって貰う事に決まった。これが辞令だ」と言つて平野に辞令書を渡した。

「はい。解りましたが、所長の職務内容と言うのが、まだ解ってないですが」と言うと所長は「君なら一ヶ月で覚えられるよ。私が教えるから安心したまえ」と言った。

「解りました」と平野が言うと「本社には連絡しておくよ。明日から仕事内容を教えるから、今日の仕事をかたづけしてくれ」と所長は言い、応接室から出て行った。

平野は「厄介な仕事が増えたな」と正直、思った。

### 仙台への異動

実際、所長の仕事は副所長の時より多忙を究めた。

副所長で対応出来ない案件は所長に回つて来る。

所長決済もある。

寝る暇惜しんで仕事に忙殺する日々が続く。

空手どころで無い状況だった。

平野は「これは、もう自分のキャパシティ超えてるな」と感じる日々が続く。

何とか赴任、二年目を迎えたが仕事が溜まり、帰郷出来ない状況だった。

空手同好会は〇人のメンバーがいた。

しかし、稽古に顔出せない状況だ。

体調もストレスから崩してしました。

(もう限界だ)と思ったある日、仙台への異動通知が来た。

内心(助かった)と言う思いがした。

## 苦難の場所探し

しかし、仙台での勤務も多忙を究めた。

その中でも(空手を広める)と言う思いは強かった。

実際、空手を広める事を考えると仕事の気分転

換にもなった。

その中で(型とヌンチャクの演武会をしてみようか)と思いつき、チラシ3000枚を刷って配布してみた。

演武会が終わると〇〇人が入門を志願して来た。(これは、やりがいがある)と平野は思い、稽古場所を探した。

最初にアプローチしたのは体育館。

しかし、一ヶ月で「もう、お貸し出来ない」と学校の職員に言われた。

腑に落ちなかったが、次の場所を探した。

そして、公民館が使えるそうだと知り、申し込んで稽古を始めた。

すると、また一ヶ月後に「もう、お貸し出来ません」と言われた。

(これは何かある)と平野が探りを入れると既得権を主張する他流派が「あそこは青少年にケンカの道具として空手を教えている」と言って回っているとは解った。

平野は(抗議しよう)と思ったが逆効果だと考え、他の場所を探す事にした。

## 神社で稽古

平野は仕事以外の時間、稽古場探しに翻弄したが見つからなかった。

（これだけ探して見つからなければ会社の屋上か駐車場で稽古するしかないか）と思いながら肩を落とす歩いてみると神社があった。

（神頼りしてみるか）と平野は思い、神社で賽銭を投げ、お参りした。

帰ろうとすると「もし」と背後から声がした。

振り返ると神主が「何をお悩みかな」と聞いて来た。

平野は「空手を教える場所を探してます」と答えた。

「ほほう。何人位に教えるのかな？」と神主が聞くと「十人位ですね」と平野は答えた。

「十人位か。わかった。じゃあ、時間を決めて境内の隅で教えなさい」と神主は言った。

「本当ですか？ありがとうございます」と平野は礼を言った。

## 稽古生三百人に増え

仕事休みの日曜日。

平野は十人の稽古生を前に「正式な稽古場所は秋島神社に決まりました」と言った。

歓声上がる。

「では、これから皆で行きましょう」と言い、秋島神社に向かった。

神社に着き「先生。只今参りました」と平野が言うと神主は「よくいらつしやいましたね。だが昨日の雨で土がぬかるんでおる。ビニールシートでも敷いて稽古しなさい」と言った。

稽古生の一人がビニールシートの調達に行き、シートを敷いて稽古が始まった。

念入りに体操し、基本稽古の四股突き、空間逆突き、前蹴り、前進後退の移動稽古をする。

平野は回数は多めにし、稽古生の体力向上に努めた。

平野はこうした内容を逐一、総本部に報告した。仕事にも慣れた頃、稽古生も増え神社の境内で

は手狭になり、近くの中学校の体育館を借りる事が出来た。

また、高段者を招聘して、講習会、演武会を行った。

そうする内に稽古生が何と三百人に膨れ上がってしまった。

それを総本部に報告すると四段師範の試験を受ける様、通知が届いた。

## 型中心

平野は休暇を取り、鹿児島島の総本部に着いた。

宗家は「君が平野君か。大学時代の事も息子から聞いたよ」と言った。

そして「今日、来ておるのは君より年上ばかりじゃ。でも心配するには及ばん。ウチの流派は年功序列では無い。実力主義だからな」と宗家は言った。

総本部の道場で二〇人程が昇段試験を受けた。

試験の内容は、基本、移動、型。

宗家は鋭い眼光で皆の動きを見る。

「君い。足の向きが全然いい加減じゃあ。それで稽古生に教えられんじやろ」と宗家は細かい所も見る。

「君い。腰が高いのう。それじゃ下半身が鍛えられんじやろ。基本も出来んで教えられんだろ」  
「何処に突いとるんか？わかつてるのか」と言った感じだ。

平野は緊張して動く。

宗家は「君い。力が入り過ぎじゃ。もっと力を抜け」と平野に宗家が言った。

全員の基本、移動、型を見た後、宗家は「今から言う者以外は、また来年でも来て、試験を受けなさい」と言った。

その中に平野は入ってなかった。  
数人残り、試験再開。

宗家は集中して皆の型を見る。

「動作の意味が解つとるのか？」と宗家は皆に言う。

皆、無言だった。

宗家が「皆、こつちへ来い」と言い、皆集まると「こんな事、二度と教えんぞ」と言い、型の動きの意味を解説した。

平野にとつては目から鱗の内容だった。

宗家は「若い頃は組手中心の稽古で良い。しかし、歳を取ると体力が落ちる。師範になったら型を追求せい。では今日は、ここまで」と言った。

## クーシヤンクー

翌朝

総本部道場で正座する者達を前に宗家は「皆、熱意を持つてご苦労。今日はクーシヤンクーの型を伝授する。この型は大変難易度が高く、四段以上の者しか教えない。今日、1日かけて習って行きなさい」と言つて指導を始めた。

宗家の指導を受け、平野は「これは難しい」と痛感した。

動作を覚えるだけでも難しい。

早朝から昼になつても覚えられない。

「メシの時間だ。休んで皆、昼メシを食え」と宗家が言つても食事を摂る者はいない。

皆、必死になつてクーシヤンクーの型の稽古に励む。

宗家は「やり過ぎは、いかんよ。メシの時間は食え」と言い、皆、昼メシを食べた。

食事が終わると稽古再開。

平野は何とか、動作だけでも覚えるのに必死だった。

気が付くと道場に夕陽が差していた。

宗家は「ヨシ、稽古止め。全員正座」と言った。

正座した門弟達を前に宗家は「皆、よく頑張つた。昇段の結果に付いては後日、連絡する。解散」と言った。

平野は関係者に挨拶し鹿児島中央駅近くのビジネスホテルに向かった。

体力的な疲れよりも宗家を前にして精神的な疲れの方が多きかった。

ホテルに着き、部屋に入り缶ビールを一本飲むと眠つてしまった。

## 東北地区本部副本部長として

## 副本部長に

仙台に帰り、暫くして四段師範の免状が届いた。それと同時に東北地区本部副本部長に任命の通達が総本部より届いた。

これにより、平野は本部長を補佐し、少林寺流空手の普及に本格的に務める事になった。

仕事は相変わらず多忙を究めた。

しかし、空手に没頭する事はストレス解消になつた。

本部運営に加担し、支部に出向き、稽古の指導に回る事は苦痛どころか、むしろ楽しかった。

（俺は空手マニアだな）と内、心思った。

この間、空手だけでなく、武器術の達人の知遇を得て習った事も大きな収穫になつた。

少林寺流も本来、棒、サイなど総合武術であり、型の中には武器術の攻防を隠した動きがある。

平野は、この頃、組手より型の稽古に没頭していた。

仕事に空手に充実した日々を送る中で平野に本部長から「話があるから、仕事が終わったら、何時もの寿司屋に来てくれ」と連絡があつた。

仕事を終え、寿司屋に行くと本部長がいた。

「お疲れ様」と本部長は言い、平野のグラスにビールを注いだ。

乾杯した後、本部長は「実はな。君に本部長をやってもらいたいんだ」と平野に言つた。

「はい。しかし自分に務まるでしょうか」と平野が聞くと「大丈夫だ。心配いらん。この事は総本部の宗家も了承している。私は故合つて本部長を退くが相談があれば、何時でも連絡くれ」と本部長は言つた。

「解りました。お引き受けします」と平野は言い、本部長に一礼した。

「地区本部をもっと大きくしてくれたまえ。君だったら出来る」と本部長は言つた。

「はい。頑張ります」と平野は答えた。



了

# 五行の拳

## 五行の拳 社会人編 第一部

2021年10月1日発行

著者 東武瑛

説の著作権は作者にあります。作者以外による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。